

昨年末、台湾の李登輝前總統の講演を聞き、お会いする機会を得た。「自分の受けた日本の教育に誇りを持っている」という言葉に衝撃を受けた。学生時代、台湾で年配のタクシー運転手から「私たちの世代は皆日本語を話します」と話しかけられ、日本統治の名残かといったまねもなく、なつた経験があったからだ。私はここで歴史問題に言及するつもりはない。教育現場の人間として、アジア有数のリーダーが「自分を作り上げたのは日本の教育」と言い切るそれが何だったのかを素直な心で見つめ、今の日本の教育に欠けたもの、今後の日本の教育に必要なものは何なのかを探ってみたいのだ。

李登輝氏のお話から私が感じたことは「私たちは戦後、教科書に墨を塗ると同時に、精神的な支柱となってきた

品川女子学院校長 漆紫穂子

解答乱麻



『よきもの』まで封印してきてしまったのではないだろうか？そして、そのツケが積もり積もって現在の大人の社

李登輝氏に学ぶ大和魂

会問題、子供の教育問題に繋がっているのではないかと。ということだった。

この講演と氏の著書の中から、次世代に伝えたいと感じたことを3つシェアしたい。

1つ目は「名譽と恥」の意識である。

氏は幼いころ母親から絶えず「そんなことをすると人に

うるし・しほこ 東京都内の私立中から父が理事長を務める品川女子学院中高に移り、国語教諭、副校長を経て昨年から現職。文部科学省新教育システム開発プログラム委員。

笑われますよ」と言われたぞうだ。「誰々にしかられる、罰せられる」という言い方をすれば子供は他律的になり、「見つからなければいい」という方向に引きずられると

危険されている。政治家の不祥事、大企業の粉飾決算など大人世界のリーダーの腐敗、子供のいじめも多くは「名譽と恥」の意識の欠如に起因しているのではないだろうか。

2つ目は「公」の心である。

氏の政治信念は「天下為公」（天下は公のため）である。このころの子供の自殺

の連鎖で「死」を話題にすることをタブー視する向きもあるが、死を見つめ、死を知ることによって「限りある生をどう生きるか」という問題意識を持つことができ、それが自先の出来事にとられず信念をもって生きることにつながるのではないだろうか。

昨年は混迷を極めた教育界だったが、新しい年は「人心不古」（いにしえの中に価値あるものとして永遠に残るものがある）という氏の言葉を心に刻み、私たちの先祖が残した「よきもの」にもう一度光を当てたい。

ここに述べたことは、私と違うものがあり、言葉足らずな面も多い。「武士道」解題（小学館）や、講演の全文が掲載される「Voice」2月号（PHP研究所）を是非、寛いだきたい。

教育

毎週月曜日掲載